

# ヨアンネス・サレスベリエンスの学芸観

田 中 峰 雄

## 【要約】

ヨアンネス・サレスベリエンスはその豊富な著作と書簡に、彼の時代の状況、人物像、論争等々について記しており、その点で十二世紀文化史上の不可欠の史料を残したことから、古くから利用され研究されてきた。しかし彼は明確に主張を打出す哲学者、思想家ではなく、したがって、その研究方向は表白された思想の成果より、むしろそれらを支える精神の面を問題とする方が有効かと思われる。本稿は、「十二世紀ルネサンス」論への否定的見解と、彼を「人文主義者」という点で規定しようとする傾向への疑問をモチーフとして、彼の精神のあり方を考えるために、著書『メタロギオン』を軸にして彼の学芸観を検討しようとするものである。まず彼の学芸修得上のいくつかの見解を明らかにして、次に古典に対してもった姿勢、真理の表明や自己の判断決定に際して示した「中庸の精神」を検討しつつ、その基底部においては、人間理性に対する強い信頼感、学芸を何よりも世俗倫理規範として捉えようとする傾向、そして「中庸の精神」が彼の学芸観を規定していたことを結論する。

史林 五八巻五号 一九七五年九月

## 一 は じ め に

本稿は、中世文化史を考察する場合不可欠ともいえる、十二世紀に生きた知識人ヨアンネス・サレスベリエンスの学問観を、特にそれを成り立たしめていた精神を検討することによって考察しようとするものである。従来の思想史は、哲学史の立場からは勿論、歴史学の立場から扱われる場合も、おしなべて表白された思想の意味の検討や、時間的、空間的比較に主眼をおいたきらいがあり、その点で、ややもすればその思想を構成している思想家の精神のダイナミズムがなおざりにされる傾向があったと思われる。本稿ではその点を顧念し、能う限り、思想形成または表白の姿勢、精神を検討の

対象とするよう努めたつもりである。

ヨアンネス・サレスベリエンス (Ioannes Saresberiensis : John of Salisbury 一一一五年頃—一一八〇年) は十二世紀中葉に活躍した教会人であり知識人である。イギリスに生まれ、若くして十二年間をパリその他に遊学、アベラルドゥス (Abelard)、シルベルトゥス (Gilbert de la Porrée)、ティエリー (Thierry de Chartres)、ロンシンのギモーヌ (Guillaume de Conches) から当代一流のマギステルたちに師事した。のち何らかの形で一一五三年頃までエウゲニウス三世時代のローマ教皇庁に関わり、その後カンタベリー大司教テオバルドゥス (Theobald)、トマス・ベケット (Thomas Becket) の秘書をつとめ、一一八〇年フランスのシャルトル司教として世を終えている。

ヨアンネスについては、有名なベケット殉教事件 (一一七〇年) およびその前後の教会・国王対立の渦中に生きた人として、また彼の政治論書『ポリクラティクス』にみえる政治思想と結合して、しばしば教会政治家、政治思想家としての側面から研究されてきた。<sup>③</sup> 一方彼はその該博な知識と幅広い人生の軌跡を通じて、当時の事件、人物像、思想状況等々にいて克明に記していることから、一級の時代証言として、十二世紀文化史研究に不可欠の史料としても扱われてきた。また一般的な哲学史、文化史の概説書で彼に与えられた位置は、例えばアベラルドゥスにも比肩しうるものをもっている。しかし、文化史の面からそのように利用され、扱われてはきたが、その立場で本格的に彼自身を扱った研究書はそれほど多いとは言えない。<sup>④</sup> そしてこのことは、政治思想の面をしばらく措けば、哲学の領域で多くの証言を残しつつも、彼が決定的には自己の立場を押し出していないというそのつかみどころのなさ、言いかえれば、思想家としての明確さの欠如に起因していると思われる。

さて、彼の生きた十二世紀は西欧文化史上画期的な時代であった。回廊の奥深く眠っていた古典古代の書物が再発見され、それと併行して多くの写本が作られることによって書物の絶対量が増加したこと、学芸が活発となり、学生や職業教師 (magister) が巷にあふれ、学的成熟の過程からやがていわゆる「翻訳活動」を招来したこと、その結果アリストテ

スの新論理学 (Logica nova) と総称される論理学諸書を筆頭とする、それまで西欧世界に未知であった古代ギリシア・ローマの文献がイスラム世界からアラビアの註釈書とともに西欧世界に紹介され、哲学その他の動向を一変してしまつたと、また医学研究や、『ローマ法大全』の再評価に端を発する市民法、教会法の研究が、ボロニアから北上し南仏、北仏の諸学院を席捲して多くの学生を引付けたことなど、どれ一つをとっても刮目に値する状況が展開されていた。さらには、それに伴い従来自由七科という伝統的な学芸の枠組が崩壊しつつ、諸学院の統合や教育制度の組織化、拡充といった転変を経て、パリ大学が形成されていくのもこの十二世紀であったことを考えあわせるなら、学界の事例に限定しても根源的な変革の時代であつたとみることができであろう。一九二七年アメリカの中史家ハスキンスがこの時代を「十二世紀ルネサンス」なる名称のもとに叙述したことについては、もはや多言を要すまい。そして、この十二世紀「ルネサンス論」は、ハスキンスの著作公刊当時は活発に論議されつゝも、今日では術語としての安定をみせているということも、また改めて述べるまでもないことであろう。

ヨアンネスへの論考はこの十二世紀の文化活動と結びつけてなされてきた。そしてその立場は教養主義に求められる。復興の現象を具現しているかのような膨大な読書量、知識量や、倦まざる旺盛な探究心、キケロを模したとされる正統的ラテン文体は、しばしばある種の称讃を伴つて言及されてきた。「ルネサンス」なる呼称が背後に予想させる「人文主義者」という概念でしばしば語られてきたことも、この点ではゆえなきことではない。そしてまさしくこの点では、ヨアンネスは十二世紀の誰よりもその規定にふさわしいものをもっていると言ふことができる。

しかし、十二世紀の文化運動やヨアンネスその人を考察しようとする場合、冒頭に述べたように、従来までの研究はそのアプローチの仕方において、多分に一面的であつたように私には思えるのである。そもそもハスキンス自身が、特に自然科学においては、十二世紀が古代から受容したものは成果のみであり、そのような成果を生み出した方法、精神はおき忘れられていたと語り、また続いてフランスで出版され、ハスキンスの著作と並び十二世紀ルネサンス論創出の双壁とも

言うべきバレルらの同名の書<sup>⑧</sup>においても、研究対象は神学運動を別にすれば教育制度などの外形的側面に限定されていたと言わざるをえない。そしてこのことはほとんどの研究に共通する性格である。一方ヨアンネスの思想を問題にする場合も、少数の例外を除けば、著作に示された形での様態、成果のみを論考するにとどまっていると思われる。しかしあれだけの大きな文化運動を理解しようとするれば、少くとも当時の人々をつき動かしていた精神のダイナミズムを検討することを怠るわけにはいかないし、ヨアンネスの博識や教義主義を考察するに際しても、そのことが彼にとっていかなる意味をもち、彼の生き方とどう接点をもっているのかを配慮せずには、何ごとも語りえないだろう。それゆえ本稿においては、彼の著書『メタロギオン<sup>⑨</sup>』を軸にして、ヨアンネスの精神がよく示されていると思われる学問観をとりあげ、彼にとっての学芸の意味と学び方、そして学芸観の中に示された学芸修得にみせる姿勢という一点を検討してみたい。そしてこのことが十二世紀の文化運動を考えるひとつの試論ともなれば幸いである。

- ① この形態は、*John of Salisbury's Letters* (London, 1955), pp. xiv-xix. キナルド・プールを起點とする通説は、カンタマリー大司教庁に入った上で、教皇庁に派遣されただけであるのが、ノートルラの反論を参照。 Cf. R. L. Poole, "John of Salisbury at Papal Court", *E.H.R.* vol. CLI (1923), pp. 321-330; C. N. L. Brooke, Introduction to *The Letters of John of Salisbury*, vol. 1: *The Early Letters*, ed. W. J. Millor, etc. (London, 1955), pp. xiv-xix.
- ② ヨアンネスの生涯については各研究書に断片的に記載をなしている。特に、*Politicarius* II-28; *Metalogion*, II-10. 断片的である。
- ③ この研究の頂点に立つのは、*H. Liebeschütz, Medieval Humanism in the Life and Writings of John of Salisbury*, London, 1950. なお、その他の論考については同誌一七頁参照。なおそれ以外では、J. Dickinson, "The Medieval Conception of
- Kingship and Some of Limitations as Developed in the Politics of John of Salisbury*", *Spectator*, vol. I (1926):—, Introduction to *The Statesman's Book of John of Salisbury*, 1927, pp. xvii-lxxxii; F. J. C. Hearnshaw, "John of Salisbury and the *Politicarius*", in *The Social and Political Ideas of Some Great Medieval Thinkers*, 1923. は重要。私の知る限り日本における唯一のヨアンネス論考で政治論を扱っている。兼平昌昭『ヨアンニス・サレスバリエンシスとローヌ・ブリカ概念』『西洋史学』第八一巻、昭和四四年。
- ④ 代表的研究は、C. C. J. Webb, *John of Salisbury*, London, 1932 (F. P. New York, 1971) 但し概観は、*R. L. Poole, "John of Salisbury"*, in *Illustrations of the History of Medieval Thought*, London, 1884; C. C. J. Webb, "John of Salisbury", *Proceedings of*

*the Aristotelian Society*, vol. II, no. 2 (1894); D. D. McGarry, "Educational Theory in the Metalegicon of John of Salisbury", *Speculum*, vol. XXIII (1948); B. Hendley, "John of Salisbury and Problem of Universals", *History of Philosophy*.

⑤ Ch. H. Haskins, *The Renaissance of the Twelfth Century*, Cambridge, Mass., 1927. 卷第「十二世紀ノネキニク」なる巻終に「ネキニクが最初に於て」。

⑥ Cf. W. A. Nitz, "The So-Called Twelfth Century Renaissance", *Speculum*, vol. XXIII (1948); U. T. Holmes, "The Ideas of a Twelfth-Century Renaissance", *Speculum*, vol. XXVI (1951); E. M. Sanford, "The Twelfth Century—Renaissance or Proto-Renaissance?" *Speculum*, vol. XXVI (1951). 「J. G. Campbell」 私家書

## 二 学 芸 観

1

『メタロギコン』は論理学擁護の書である。ただここで言う「論理学」(logica)に彼は広狭の両義をこめていゝことは注意を要する。すなわち、広義には「言語表現と論証上の原理」<sup>①</sup>と定義され、狭義には「論証上の原理」にのみ限定される。<sup>②</sup>前者は「言語に関するすべての規則を含むもの」<sup>③</sup>であり、後者は「真と偽を区別し、いかなる論法が論争において確固たる証明となりうるか、いかなる論法が説得力をもつのかを示す」<sup>④</sup>ものである。これはいわゆる自由七科(septem artes liberales)体系に於いて、前者を「三学」(trivium)すべてを包括するものとして、後者をその中の「弁証法」(dialectica)一科に符合させたものだと考えられる。この論理学の両義性は重要であつて、彼の論理学擁護もこの両義においてなされることになるのである。

はサン・ノード論文と比較的に同調しよう。なほ「兼岩正夫「十二世紀の問題——所謂『十二世紀ノネキニクス』とその批判をめぐって」『西洋史学』第二八巻 昭和三十一年 参照。

① Ch. H. Haskins, *op. cit.*, p. 331.

② G. Paré, A. Brunet et P. Tremblay, *La Renaissance du XIIe Siècle: Les Ecoles et L'Enseignement*, Ottawa-Paris, 1933.

③ C. C. J. Webb, "John of Salisbury", *Proc. of the Arist. Society*, 卷第「ホインシグ」前「ロシニク」精神の「人ノール」ニ「リ」の「メン」(里見二郎訳)『ホインシグ選集4』河出書房新社、昭和四六年。

④ 『メタロギコン』は「ホインシグ」が「カンタベリー」大司教「オバルド」(Theobald)の「秘書」であつた(一五九九年秋、『ポリアクニヤタス』(同年夏)に引續ぎて脱稿された。後出六五頁註⑥参照)。

さてヨアンネスは『メタロギコン』序文で、彼が『ポリクラティクス』で宮廷人たちの慰みごとを批判したことをふまえてつ、再びその無用性を一瞥し、しかもそのような宮廷人によって「論理学者の仕事がかなり激しく無益なものとして嘲弄されている」ので論理学を擁護すべく論争を余儀なくされた、<sup>⑧</sup>とその執筆事情を述べている。<sup>⑨</sup> 形式的にはこの書は「論理学の敵対者」と形容されうる「コルニフィキウス」(Cornificus)なる匿名の一人物に対する論駁書である。しかし彼の批判の鋒先は単に「コルニフィキウスにとどまらず、例えばコルニフィキウスの教師、同僚から、コルニフィキウスに追随する者まで含めた一群のコルニフィキウス一派、つまり彼の意識では当代の悪しき風潮そのものにまで拡大する。<sup>⑩</sup> すべて彼の眼からは論理学を侮蔑し攻撃する者たちである。ある者は学芸をまじめに学ぶことを軽蔑し、文法学や雄弁術など「啞でなければ話し盲でなければ見る」ように人間に生来のものであるから学ぶに足りずと豪語し、<sup>⑪</sup>ある者は賢くなるよりはそうみえることを好み、<sup>⑫</sup>またある者は学芸を営利事業とみなし、<sup>⑬</sup>さらにある者は錯綜した詭弁論に没頭し、「市場に曳かれていく豚は人が引いているのか綱が引いているのか」などと空虚な議論に熱中している。<sup>⑭</sup> 多少図式的にみれば、前三例に広義の論理学 (trivium) の価値を侮蔑している例を、後一例に狭義の論理学 (dialectica) 本来のあり方を誤っている例を認めることができよう。彼はこうして論理学の敵対者コルニフィキウス一派に対し、両義において論理学を擁護し、その有用性、本来的あり方を論じることになる。本章の考察はこの擁護論に示された彼の学芸観に向けられる。

まず彼が学芸 (ars) をどのように捉えているのかを検討しなければならぬ。この点について彼は正面から明言してはいないが、全篇を通じての彼の意識は次の言葉に集約的に投影されていると考えられる。

学芸とは、自己に含まれている生来の能力 (possibilia facultatem) を最短距離で自然に開発するように理性が作った体系であり、……「それなくしては陥ってしまう」まわり道を、簡潔で直接的な方法におきかえるものである。<sup>⑮</sup>

(一) 内引用者

ここで学芸は「生来の能力」すなわち慣用的語法に従えば「本性」(natura) 開発の体系と捉えられる。一方別の個所で

彼は、「本性」すなわち「生来の才能」(ingenium)は「努力」(studium)を通してこそ十分に發揮されると言う。

生来の才能……も努力なくして十分開花するほど、それほど効果的なものではない。無視することによって弱くならないほど強壯なものは何もないし、こわれてしまわないほど堅固なものもない。反対に精勤に錬磨することによって、きわめて乏しい才能をも成長させ、保持することができるようになるのである。もし才能が恵まれたものであるなら、断に修養すべきである。そうすることによって実は豊かに収穫されるであろう。またもし恵まれたものでなくても、より一層注意深くはぐくむべきだ。そうすることにより、徳の助けが加わって、より輝かしく強く成長するであろう。<sup>14)</sup>

すなわち彼にとって学芸とは、個々人が本来的に賦与されている才能を十分に發揮するよう努力する、その努力を効果的に行なわせる手段と意識されている。一方、「哲学」(philosophia)とは彼にとって一面では語学芸の総体である。この面において学芸が個別学としてその各々の領域で作用するのに対し、哲学は総体としてひとつの方向性をもつ。したがって語学芸は、それらの総体としての哲学のもつ方向性に合致する形で作用することが望まれる。ところでその哲学の方向性は彼においてもやはり字義通り「智恵」(sapientia)である。かくして語学芸は、一方で個々の領域における本性の開發に寄与しつつ、一方でその方向性として智恵の探究を志向することになる(このことの間隙があることは否めないが、これについては後述する)。しかし彼はこの段階にとどまりはしない。

あらゆることの中で最も望ましいことは智恵であり、智恵の実は善性への愛と徳の涵養に(in amore boni et virtutum cultu)ある。それゆえ精神を智恵の探究にふり向けて、善と徳に関する明確で不動の判断力を形成すべく、ことさらに<sup>15)</sup>について完全に探査しなければならない。

ここでは智恵の意味が積極的に問われ、智恵は善と徳に結合することに価値があると意識される。したがって、語学芸は智恵を志向すべきものである以上、それはその領域において「善と徳に関する明確で不動の判断力」形成をめざして学ばなければならない。その点で序文における次の宣言も彼の学芸観の必然的表出である。

私はこの作品の中に道徳 (mores) に関するいくつかのことを折にふれて挿入した。もし何か人生の支え (adminiculum vitae) とならぬらうならば、読まれること、書かれてあることのすべてが無益なものになると私は考えているゆえである。何故なら、徳の涵養 (cultu virtutis) や生の営み (vitae exhibitione) の中に関連をもたないかなる哲学の作業も無益で偽りであるからである。<sup>⑮</sup>

さて以上の点をふまえた上で、次に、個々の学芸修得にあたって彼の示した観点のうち特に二点を強調しておきたい。まず第一は雄弁術 (eloquentia) の重視である。彼によれば、雄弁とは単に話すことをいうのではなく、「適切にそして効果的に、意図するところにそって自分自身を表現する」こと、さらには「意識の内奥に〔自分でも気付かず〕秘められているものに光をあて、表現によって公けにする」<sup>⑰</sup>ことをさすのである。それゆえ、確かに、「智恵を欠いた雄弁は不毛である」<sup>⑯</sup>が、同時に、雄弁を欠いた智恵も「個人の自己満足に終始し、社会生活に益することは稀」<sup>⑰</sup>であって、智恵（あるいは知識）または理性と雄弁とは不可分なものとして並列的に強調されることになる。この場合彼は、人間を他の生物より分つものは人間にのみ属する「理性と表現の力という尊厳」<sup>⑱</sup>であるという伝統的観点を背景にしている。第二に強調すべきは、彼には、長い年月を費して、基礎課程を確実に踏破しつつ段階的に学ぶことを説く姿勢が強くみられることである。それは学芸修得の順序であれ、一学芸に取組む場合であれ、初学者がはじめから高度な階梯を修めるべきではないとする姿勢であり、難解な作業も然るべき課程を修めてきた者には容易なものになりうるはずと確信する姿勢である。<sup>⑲</sup>これは学芸修得の順序として、まず文法学 (grammatica) に十分習熟するべきことを説くことに結び付く。何故なら文法学とは「正しく話すことと読むことを教える学」<sup>⑳</sup>であって、その点で「すべての自由学芸の出発点」<sup>㉑</sup>「すべての哲学の淵源」<sup>㉒</sup>であるばかりか、少年期の学習において「少年の才能を鋭敏にし、きわめて高い学識と真の知識の獲得を可能にする」<sup>㉓</sup>ものだからである。それゆえヨアンネスは、文法学に習熟することを怠れば、弁証法を学ぼうとしても「生まれた時から視力聴力を欠く者より」学ぶことは困難と断定するのである。<sup>㉔</sup>なおこの文法学という基礎課程の強調は、さらに「論理学



(弁証法)を知らずして哲学しようとする者は……」という形で、諸学芸の段階的修得の強調へと発展していく。

以上のように、彼は学芸修得において雄弁術の必要性和基礎課程に習熟した段階的学習の必要性を強調した。ところが彼の議論の当面の対象たるコルニフィキウス一派は、先程述べたように文法、雄弁を生来の才能とするのみで、その価値や本性のもつ可能性に対して扱うべき配慮が欠如しているから、訓練は不必要と主張し、また学芸を修める場合にも「二、三年以内に哲学すべてを与えよ」と要求するとき俄勉強でもって哲学者らしくみせようとしている。これはヨアンネスの眼からみれば明らかに広義の論理学をなおざりにすることであろう。しかもそのようなコルニフィキウス一派が過度に重視するのが弁証法である。ヨアンネスにとって弁証法はきわめて重要な学芸である。それは真偽を弁別し、ありうることとありえないことを識別し、証明の構造を分析し論争の様式を決定する学芸であって、弁証法を欠如してはいかなる哲学も理解されない以上、哲学研究に不可欠の要素を構成するものである。しかしそこにはおのずから限定がつく。まずあくまでもそれは学芸の連関に正当に位置づけられていなければならぬ。すなわち、学芸本来の意味と目的とを認識し、雄弁を伴い基礎課程(文法学)に習熟している場合において、初めて価値と効用を有するのである。その点でコルニフィキウス一派のようにただ弁証法のみ学んでも弁証法本来の効力は生まれない。また弁証法はその論理的命題、証明力、推理力が他の学芸あるいは現実社会の場に適用されてこそ真の価値を発揮するのであり、自己目的または自己回帰的学芸ではない。二つの相矛盾する命題は同時に真たりうるか」というようなことは弁証法だけで解決しうるが、これらは個々の場合に應用せずには何ら有効性をもたないものであり、「そこにわれわれの人生が幸福か、救済に至りうるかが関わっている」<sup>⑧</sup>。楽しみは善か<sup>⑨</sup>。徳は他の何よりも好ましいか<sup>⑩</sup>。等々のことは弁証法によって解きえないことを知るべきである。そしてこの点においてもまた、弁証法しか学ばないコルニフィキウス一派にはその真の価値は示されない。彼ら似而非弁証法家が「弁証法」と称して、ただ「整合性」(convenientia)とか「理法」(ratio)という名辭ばかりを口に、否定に否定を重ねて、ついには否定の數(vis negationis = 否定の力)を数えるための計算盤(calculus)をもたねば論争できぬ

位に混乱し<sup>②</sup>、そして先程の引用を繰返せば、「市場に曳かれていく豚は、人が引いているのか綱が引いているのか」などと激論しているのは、学芸本来の姿を忘れた象徴的な戯画でしかない。

当代の人々が扱っているように、弁証法だけが独占され、弁証法だけが一人で歩きまわり、他に関心も示さず、自らの深さや秘奥を何度かはかるだけで、家政にも軍隊にも商売にも宗教にも、政治にも教会にも全く有効でないようなことに自己を限定し、学校だけで評価されているようなら、弁証法は無意味である。<sup>③</sup>

ヨアンネスは広狭両義において論理学を擁護しているが、このようにみてるなら、両義において擁護の対象となる論理学の頹廢の根は、彼の意識において実は同一である。狭義における論理学の無意味さはまさに広義における論理学をおざりにしたことに由来し、それゆえに、弁証法に実を与えるためには学芸全体の擁護が必要とされるのである。『メタロギコン』はその内容配分からみても弁証法擁護に主眼がおかれていると思われるが、結局そのことは、彼にとって学芸全体を擁護することぬぎには考えられなかったのであろう。

① *loquendi vel disserendi ratio*. 一応文意からすると本文の「*loquendi vel disserendi*」に限定することは「*loquendi*」に限定するより「*loquendi et disserendi*」とすべきであろうが、他の箇所(二卷二章)との関連を考慮する方がより彼の意に合うと判断した。

② *Metalegion* (以下 *Met.* と省略) 1-10, p. 29. (直数は Giles 版 *Opera Omnia* 第五巻246頁。以下同じ。J. A. Giles, ed., *Joannis Saresburiensis Opera Omnia*, 5 vols., London, 1848 (r. p. Leipzig, 1969).)

③ *Met.* 1-10, p. 29.

④ *Met.* II-2, p. 64.

⑤ C. C. J. Webb, ed., *Joannis Saresburiensis Policraticus sive de regis curativum et vestigis philosophorum*, libri VIII, London, 1909 (r. p.

Frankfurt a. M., 1965).

⑥ *Met. Prolog.*, p. 8.

⑦ 一五六一五七年にわたりヨアンネスの教会至上主義的觀點が、國王(アンリ二世)のアンシレー伯時代からの側近たる(特に Arnulf de Lisieux) の告発を以て、彼の立場がきわめて不利なものととなり、亡命を余儀なくせられた( *Eph.* 108; Giles, *Opera*, I, p. 158; *Letters of John of Salisbury*, p. 30 (No. 18) ) 状況に臨むに、*loquendi et disserendi* の対立不和は統制を失ったと思われる。この辺の事情は *loquendi et disserendi* *Eph.* 96, 97, 108, 112, 113, 115, 121, 128. に彼の記述がみられる。また R. L. Poole, "The Early Correspondence of John of Salisbury", *Proc. of Brit. Academy*, vol. XI (1924), esp. pp. 8-12.; G. Constable, "The Alleged Disgrace of John of

Salsbury in 1159", *E. H. R.*, vol. LXIX (1954), pp. 67-76. 等参照。なぞの事件を Poole らは一一五九年のこととして『ボリタラチヤム』『メタロキオン』執筆をそのような対立と直接結びつけたが、Constable は一一五六—七年のことと反証し、この事件は一一五七年夏には解決してゐるから事件と両著執筆は無関係と断定してゐる。私としては事件の年代では Constable 説をとりたが、対立不和のものは一五九九年時点でお心理的の継続に似た感が両著の端々に隠されてゐることを、特に *Met. Prolog.*: III-prol.; IV-prol.; IV-42; *Polytricus*, *Prolog.*: Ep. 59. 執筆が事件と無関係とどうも結論には承服しかねる。

⑧ コルニニキウスは誰かとはしなばは論じられてきた。例えば Cierval はシャルトル学院の学生に描定し (*Op. cit.*, p. 183) ； また Mino-Paluello はヨアンネスの「コルニニキウス描写」にナム・ド・ハ・トヤ・ボンの学説との鮮やかな一致点を証明してゐる ("The *Mrs disserendi of Adam of Balsam 'Parvipontanus'*", *Medieval and Renaissance Studies*, vol. III (1954), pp. 141-6). しかしこれらはすべて彼の言で「コルニニキウス一派」のことであり、コルニニキウスその人を描定してゐることにはならぬ。この「一派」についての記述はヨアンネス自身にも混同多く、例えば明らかに誤つて「ラルドラスの言説」の一派のものとしてゐる (*Met.* I-5, p. 22 と『フヘラールとロコーズ』(畠中訳、岩波文庫、昭和三九年)一五頁を比較された)。なお私は「コルニニキウス」その人は、前註の Arnulf de Lisieux と推定できると思つてゐるが、この穿鑿論證の意味があるとは思へない。

- ⑨ *Met.* I-1, 3.
- ⑩ *Met.* I-2.
- ⑪ *Met.* I-3 sq.

- ⑫ *Met.* I-3.
- ⑬ *Met.* I-11, p. 30.
- ⑭ *Met.* I-8, p. 28.
- ⑮ *Met.* II-1, p. 62 sq.
- ⑯ *Met.* Prolog., p. 9.
- ⑰ *Met.* I-7, p. 24 sq.
- ⑱ *Met.* II-9, p. 75 (*Cicero. De Oratore*, IV-14)
- ⑲ *Met.* I-1, p. 12 sq.
- ⑳ *Met.* I-7, p. 25.

⑳ この意識を最も典型的に示してゐる箇所を引用しておく。  
「プリヌタテレスも言うように、ある課題について存在する多くの意見を認識して置くことは、論争においては有益であり効果的である。……しかし初歩的な論理学〔の階梯〕におおつては、そのようなやり方が適切であるとは私は思へない。可能な限りの単純な、簡潔な、そして課題の平明な語彙が、初歩の学習におおつては評価されるべきである。それゆゑ難解な箇所を、そのもの(本性 natura)が敢密に要求してゐるよりもっと単純なやり方で註釈しても許されるであらう。このようにしてわれわれが若き頃学んできたことの多くが、後になりより進んだ研究の階梯で訂正されるものだからである。それにもかかわらず今日ではすべての人々がここ(初歩的論理学の階梯)で「普通の」性格について熱弁をふるひ、説明しようと試みるから、「著作家」(プリヌタテレス)の「普通な(普通の)」意図からはすれてしまつたことになるのである」(*Met.* II-17, p. 90) (「……」はちよる(……)は引用者)

- ㉑ *Met.* I-13, p. 34. (*Isidorus, Etymologiarum sive originum*, I-5 § 1)
- ㉒ *Met.* I-13, p. 34.
- ㉓ *Met.* I-13, p. 34.

②⑤ *Met.* I-25, p. 61. (Quintilianus, *De Institutione oratoris*, I-4, § 6)

②⑥ *Met.* I-13, p. 34.

②⑦ 「しかし後になると一般の意見が真理よりはずれ、人々は哲学者であるよりもそう思われることを好むようになり、学芸の教師たちが二三年以内に哲学すべてを与えたと約束するに及んで、『私の文法學士の師であり、生活態度、学究姿勢ともどもすぐれていた』キョームとリカルドウスは無知な連中の猛攻撃をへらして引退した」(*Met.* I-24, p. 66) (括弧内は直前の文章から)

②⑧ ミアンネスは彼らを「狂気の崖上に立つ者」(*Met.* I-7, p. 26) とか

2

さて彼の学芸観を当時の時代状況の中で考えるために、ここでは少し自由七科の扱われ方について検討してみたい。周知のごとく、十二世紀までの西欧中世世界に一貫して支配的であった学芸の枠組みは「自由七科」(septem artes liberales)である。これは文法学、修辭学、弁証法と、算術、音楽、幾何、天文の七科から成り、通例前三科を「三学」(trivium)、後四科を「四科」(quadrivium)と総称する。アルクイン (Alcuin) はこれを哲学の七階梯として、これらすべてを通じて精神は「聖書の高みに登りゆく」としたし、また「智慧を支える七つの柱」とも呼ばれた。しかしここに問題は残る。すなわち、自由七科は元来あくまで入門的基礎学芸として確立されたものであって、哲学すべての分類法としての、例えばアリストテレス的な、「理論哲学」——第一哲学、数学、自然学——、「実用哲学」——倫理学、家政学、政治学——、「詩学」そして「論理学」という区分法、あるいは「自然学」「倫理学」「論理学」というストア的三区分法と併存する、または、併存すべきものであったはずである。事実自由七科なる枠組みを中世に伝えたインドルスもカシオドルスもともに哲学の分類と矛盾なく、その入門として七科を記述している。ところが中世においては、本来哲学の入門課程にすぎない七科が、哲学を欠落させたままそれぞれ自身哲学そのものであると考えられたり、七科のみで直接聖書解釈に結びつけられ

呼ぶ、また「ボネブスを見たただけでムーサの仲間と記される資格ありよめる連中」よりまた低劣と痛罵してゐる (*Met.* I-2, p. 14)。

②⑨ *Met.* II-2, p. 64.; II-3, p. 65 sq.

③⑩ *Met.* II-3, p. 65.

③⑪ *Met.* II-11, p. 81 sq.

③⑫ *Met.* I-3, p. 16.

③⑬ ..nec domi, nec militiae, nec in foro, nec in claustris, nec in curia, nec in Ecclesia, imo nusquam, nisi in schola, praesunt. (*Met.* II-9, p. 77)

てしまっているのである。このことは奇妙な現象である。これについては、例えばステーンベルヘンは、古代哲学のもっている自己完結性をうち棄てて「異教的哲学をキリスト教的総合でおき代えた」ものだ<sup>⑤</sup>と説明するし、またもっと直接に、翻訳活動以前の西欧は〈形而上学〉〈自然学〉〈倫理学〉といった「哲学」をもっていなかったからであるとの説明もなされている<sup>⑥</sup>。私の考えとしては、おそらくは後者により重点をおいた上で共に考えられる説明であると思う。ともかくもこの奇妙さの中で十二世紀前半期の思想家が苦闘している例をいくつかみることができよう。

まずティエリー (Thierry de Chartres) の場合をみてみよう。彼は一一四〇年頃著した『エプタテウコン (自由七科教程)』(Eptateuchon) の序文で、自由七科の必要性を説き、その伝統の発展継承を謳いつつ次のように述べる。

自由七科という科目をギリシア人はエプタテウコンと呼んでいる。マルクス・ワッローがラテン世界で最初にそれを構成し、続いてプリニウスが、さらにはマルティアヌス・カペッラが引継いだ。彼らはその土台をかためたのである。われわれの為すべきことは、細心の注意をもってまた秩序正しくそれらを一体として、またわれわれの作品をではなく、その学芸についての一級の教師たちの作品を展開し、さらに哲学という高貴な分野を高めるために、三学と四科をとともに、あたかも夫婦のごとく結合させることである。……哲学者にとって二つの道具 (instrumenta) がある。曰く、知性と表現力である。知性は四科によって輝きを増し、優雅で説得力のある美しい表現は三学によってつちかわれる。かくして、エプタテウコンはすべての哲学者にとって適切にして唯一の道具であることが分る。<sup>⑦</sup>

このように彼は伝統的な形で、「三学」を言語表現に、「四科」を知性錬磨に結びつけたが、あまりにも教条的断言であるろう。すなわち「三学」中の弁証法は当時既に言語表現にとどまらず、言語解釈を通じての認識論の領域にまで入っていたし、また何よりも「四学」(すなわちアリストテレスの語法での〈数学〉)を知性に結びつけることには無理がある。何故なら当時の思想家にとっての数学研究の原典たるポエティウス<sup>⑧</sup>その人が、〈第一哲学〉〈数学〉〈自然学〉のいわゆる「理論哲学」の一系として数学をあげ、それは当然に〈自然学〉を前提としていたからである。実際、「翻訳活動」の成

果として〈自然学〉を知るようになった西欧人は、パリ大学においては十三世紀前半の数次の禁令にもかかわらずそれを研究したことが跡付けられているし、禁令のなかったオックスフォード大学では、ロバート・グロステスト (Robert Grosseteste)、ロバート・キルウォード・グイ (Robert Kilwardby) そしてベーコン (Roger Bacon) らによって熱心に研究され、その〈自然学〉研究を前提とした上で〈数学〉の必要性が説かれているのである。この点で〈自然学〉を知らないティエリーの宣言には無理があり、宣言自体、気負いに内実が付随せぬまま空転してしまっている観を免かれない。次に「ホノリウス・アウグストドゥネンシス」(Honorius Augustodunensis) についてみてみよう。この人物については謎が多く、彼自身言う匿名のこの名でしか知られていない。⑧ 彼には十二世紀前半と推定される『たましいの放浪と故郷について』(De animae exsilio et patria) ⑨ という小論があるが、彼はこの中で、人間の現在の状況を故郷より遠く離れた旅人の状況とみため、真理認識に不可欠の学芸を、旅人が故郷に至るために通過しなければならぬ町々になぞらえつつ彼の学芸観を展開している。すなわち帰郷を志した旅人は、まず(1)〈文法〉の町に入り、ここでドナートゥスとプリスキアースより言語を学び、(2)〈修辞学〉の町でキケロより基本徳目を学び、(3)〈弁証法〉の町でアリストテレスより弁証法なる武器を付与され、ポエティウスより(4)〈算術〉の町で数の関係、(5)〈音楽〉の町で音の調和を学び、(6)〈幾何学(地理学)〉の町でアラートゥスより世界の地図を示されて、現在のよるべない状況を喚起する。続いて(7)〈天文学〉の町で天体の配列の妙を学び創造主を讚美する。また(8)〈医学〉の町でヒポクラテスより肉体の治療を学んで魂の治療の必要性を痛感し、(9)〈機械学〉(mechanica) の町でソロモンの寺院、ノアの箱船の構造を知り、そして(10)〈家政学〉の町で支配と尊厳 (regna et dignitates) ⑩、奉仕と命令 (officia et ordines) のちがいを学ぶ。こうして旅人は十の町を経過した後ついに故郷である「至上の町」(superna civitas) に至り、その山にモーゼ、エリアとともに旅人を迎えるキリストの姿を視るのである。「ホノリウス」はこのように真理認識のための学芸として、ポエティウス、インドルスの順序に従って七科と、そして医学 (physica)、機械学 (mechanica) ⑪、家政学 (oeconomica) とをあげた。この十科の配列は珍しくその点で独

創的だが、しかし言うまでもなく、根本においてここにもアルクイン的短絡がみられるであろう。もうひとり、さらに興味深いのが聖ヴィクトル教会のフゴー (Hughes de S. Victor) の場合である。彼は彼の同時代人コンシエのギョーム (Guillaume de Conches) を通じて、アリストテレス—ボエティウスの哲学分類を知っていたとみえ、その分類を大幅に彼の学芸論書『ディダスカリコン』(Didascalicon)<sup>12)</sup> にとり入れようとしている。さて彼は、人間の本性は原罪により墮落しているということを基本認識として、哲学を何よりもその本性の回復、言い換えれば「人間にとっては形相でしかないが、神にとっては本性である聖なる類似性 (divina similitudo) の回復」<sup>13)</sup> と捉える。すなわち「その中に完全な善の形相 (perfecti boni forma) を含む聖なる智慧 (Sapientia)」<sup>14)</sup> を愛することが哲学である。それゆえ哲学のプランチとしての諸学芸は、本性の回復のために学ばなければならない。このような観点にそってフゴーは、一応初等科目として七科を認めつつも、哲学にふくまれる諸学芸として二一の個別学芸をあげ、それらを真理認識を目的とする「理論的」あるいは「思弁的」哲学、徳の実践に関わる「実践的」あるいは「現実的 (倫理的)」哲学、人間の肉体による束縛軽減を促す「機械的」哲学、そして「論理学」の四種に分類する (章末別図参照)。このような分類は古代には一般的であっても十二世紀までの中世にはあまり類例をみず、フゴーを祖としてこれ以降ボナヴェントゥーラ (Bonaventura) に至るまでの学芸分類の主流とされたといわれるが、その意味で斬新で、フゴーの哲学論形成の苦心を物語るものがある。しかし、とは言ってもこの分類はシェーマとしての斬新さとは逆にただ配列しただけという観は免かれない。「現実的哲学」については『ディダスカリコン』中に言及はなく、また「理論的哲学」においても〈自然学〉は同様であり、新しく付加した「機械的哲学」も、その必要性の強調とは裏腹に実際の記述はインドルスより借用した語義の説明に終始している。つまり『ディダスカリコン』においても、現実的に問題とされたのは「論理学」とあまりにも稚拙な形で〈数学〉、すなわち従来の三学と四科でしかない。フゴーの意図と自負とにかかわりなく、ここにも学芸内容の非存在というあまりにも大きな時代の壁につきあたっている例を認めることができるだろう。

さてこのような時代にあつてヨアンネスもまた自由学芸の重要性を標榜するが、そこには今あげた人々とは若干異なつたニュアンスのあることは否めない。彼は次のように述べている。

諸学芸には多くの類があるが、哲学せんとする者のまず第一に関わるのが自由学芸であり、三学と四科から成つてい  
る。……われわれの祖先は自由学芸を勤勉に学ぶことにより、読むあらゆることを理解しうるようになり、すべてに対  
する理解力を高め、解決可能な問題の糸口をときほぐしていった。……三学の体系が言葉のすべての重要性をあらわし、  
四科の規則が自然のすべての秘奥をあらわしていた人々にとって、書物の意味を理解し、問題を解決するために教師の  
助けなどいらないものであつた。<sup>⑧</sup>

さらに続けて彼は、それらが「リベラーレス」(liberales)と呼ばれるのは、古代人がそれで子供(tiberi)を教育したた  
めか、あるいはその目的が人間の自由(libertas)の実現にあるためであると述べて、次のように結ぶ。

きわめてしばしばそれら(自由学芸)は我々を、智恵とは関わりない関心事より自由にし、「地上的」欠乏を取除く。  
またさらに、それらはしばしば哲学せんとする精神がより自由にその道を歩めるように、「肉体的」欠乏のわずらいを  
取除きもする。<sup>⑨</sup>(……)および(……)は引用者)

以上のようにヨアンネスは自由七科の重要性を強調しているが、そこには彼の特色ともいえるいくつかの重要な留保をつ  
けなければならぬ。まず第一に、彼が自由学芸なる概念と哲学なる概念とを区別して用いていることは特筆すべきであ  
ろう。『メタロギコン』の用語は厳密さを欠き、前節でみたように哲学に自由学芸をふくめた全学芸を包摂させて考えて  
いる場合もあるが、ここで少くとも自由学芸の定義を正面から扱おうとする時、彼は意識的にも自由学芸を本来的意味で  
哲学せんとする者の基礎課程として捉えていることは明らかである。第二に、彼は自由七科を強調はしても、伝統の枠  
中に自己を限定してはいない。自由七科の伝統はそのシェーマとしての根強さとともに、例えば先程述べたティエリーも  
「われわれの作品をではなく、その学芸についての一級の教師たちの作品を」と言うように、各学芸について権威ある著



作あるいは著作家が決定されていたことに特色がある。しかしヨアンネスが例えば次章で検討するように、伝統的典拠のみならず同時代人の所論をも意識的に援用し、さらにアリストテレスの「新論理学」(logica nova)のひとつ『トピカ』の価値が定まっていけない時期にいち早くその価値を認めている点など、伝統の継承とともに新しいものをも積極的に取入れていこうとした姿勢には評価すべき点がある。そして第三に、彼にはフゴアの哲学の分類案を知っていた形跡が認められるにもかかわらず、『メタロギコン』で、そのことに言及しようとはしていない。彼が『ディダスカリコン』より明らかに二、三箇所引用していることから、多分彼はこの書を読み、アリストテレスーボエティウスの区分を知りえたであろうし、また「翻訳活動」の成果のまさに流入期にいち早く『トピカ』に着目した点などから、別の系統からもその分類を知りえたであろうが、しかし彼はかかる分類法にも、またフゴアのいわゆる「機械的哲学」なる概念にも全く沈黙している。私のみたところではただ一個所、ストアの分類を(誤って逍遙学派の分類として)紹介しているだけである。このことは『メタロギコン』が目的を広狭両義の論理学の擁護に定めていることや、彼が上級初級の内容を区別しようとしていること等でも一部説明はつくがそれだけではなからう。そしてこのことに彼の観点の重要な一側面があると思われるのである。

まず前節で少し触れたことをより明瞭にするために、ヨアンネスの哲学観とフゴアの哲学観との相違は検討してみる必要がある。「哲学」を「智恵」の探究とし、「智恵」を「善」と結びつける点において両者は共通するが、フゴアにとっての「智恵」が神と同置される「善」を内含するのに対し、ヨアンネスにとっては、「善」および「徳」は一般に世俗倫理規範として意識される傾向が強く、また「智恵」(sapientia)も少くとも一般的用例としては「知識」(scientia)と代置可能な場合がきわめて多い。『メタロギコン』の非厳密性にも因があるが、ヨアンネスにとっての「智恵」または「善」さらには「哲学」にはフゴアのような形での神聖さとの関連は稀薄である。さらに、フゴアが本性の墮落を基本認識とするのに対し、ヨアンネスはむしろ本性の尊厳に重点をおく。本性の回復ではなく、そのもつ可能性の開発である。このようにヨアンネスにとっての哲学は、聖学の面より現実社会における効用の面がより強調されている。既にみたごとく、





三 古典観と「中庸の精神」

1

「その記憶力は中世のいかなる大図書館をも凌駕する」という評価に集約されるごとく、ヨアンネスの知識量、記憶力には驚くべきものがある。そしてその該博な知識は十二分に彼の著作に展開され、そこには当時知られていたほとんどすべての古典作家の文章が組込まれていると言っても過言ではない。キリスト教徒のものであれ異教時代の著作家のものであれ、哲学者、教父、詩人、雄弁家、風刺作家を問わず、彼の著作に引用された著作家、著作数は膨大な量に達する<sup>②</sup>。この点はヨアンネス研究史上早くから注目されてきたことで、多くの研究者はそこに彼の古典愛好、古典への傾倒を窺取ってきた。しかも彼の文体がキケロの文体を模し、中世においてきわめて稀なる典雅さをもっていると評価されていることも関連し、彼が通例「人文主義者」の名で呼ばれてきたことは周知のことであろう。「ペトルカ以前の、中世における人文主義者の代表の一人」<sup>③</sup>「中世における最も純粹かつ輝かしいラティニスト」<sup>④</sup>「正統的な学識ある人文主義者」<sup>⑤</sup>とか、「十二世紀における最も完成された文章家」<sup>⑥</sup>等々である<sup>⑦</sup>。

しかし言うまでもなく、引用文献のすべてを彼が原文にて読んだわけではない。当時流布していた諸註釈書やインドルスの百科全書その他からの孫引きや、あるいは文法書に例文とされた章句をも自由に引用して自己の所説の補強とし、また断章のままその言いまわしのみを愛好している例も多い<sup>⑧</sup>。そして断片的であるがゆえに原著の本趣を損ねることがしばしばあることが指摘されて、今度は、このような古典引用、古典愛好が果して真の古典愛好の名に値するだろうかという批判が展開された。彼を人文主義者と規定することを否定する研究者の一致した見解である。例えばヨアンネス研究に多大の業績を残したリーベシュツは、『ポリクラティクス』における彼のキケロ、セネカ等古典の引用とその原著のコンテクトを丹念に調べ、何ら古典を本当に理解しようとしたものではなかったことを指摘して、「ジョンの古代哲学の利用

は、『ポリクラティクス』の道徳的、政治的問題に関する限り、同時代人に対する彼の意見に合致し、それを代弁する場合に限定されていた。……古代思想の体系を掘起こそうとすることなど彼の意図したことではなかったのだ。反対にわれわれには、彼がセネカや特にキケロを引用しようとする傾向は、古典の思想を構成しているすべての理念を排斥するものであったようにも思えてくるのである」と結論づけている<sup>⑧</sup>。さらに英国の中世史家サザンは、中世の人文主義にふれた講演の中で、中世の人文主義を古典愛好の面から論ずるのは的はずれであり、中世の古典愛好などたるにたりないとして次のように述べる。「中世の文章家や古典愛好家をみると、彼らがあればほど頻繁に引用しているその古典作家たちによりにも無関心であることを知り面くらってしまう。例えばソールズベリーのジョンのような著名なヒューマニストをみれば、彼が古典を漁り、自己の文章を夥しい引用文で飾りながら、その古典の根源の精神に徹底的に無関心であることを知り、この偉大な男が古代文学にどんな感覚をもっていたのか考えこんでしまうのである。確かにこんなものはペトルカカ<sup>⑨</sup>の感覚ではない」。この観点は明らかにブルダッハ以来のルネサンス史家の観点に共通するものであろう。すなわち、古典の知識、古典の単なる受容という視点では中世とルネサンスを分つものはないと一応認めた上で、しかし中世には「——恐らくはそれこそ主要なことなのだが——模倣される著作家たちの人間性と彼らの文体の独自の個性に対する、新たに目醒めた感覚<sup>⑩</sup>」というルネサンスの特性が欠如していることを強調し、受容のあり方、古典に対する態度が全く異なっている、とする観点である。パノフスキーはこれを「遠近法的視点」の欠如と表現する<sup>⑪</sup>。

以上のような観点は確かに説得力に富むものである。しかし十二世紀の精神やヨアンネスを考える場合、このような観点で適切になってしまうことが有効かどうかは疑問であろう。何故ならこの観点は古典利用のあり方に焦点をあてつつも、より本質的に、その中に示された「古典観」の検討という視点を明らかに欠落してしまっているからである。古典は規範として彼にとって確かに大きな存在であった。しかしこのことと、彼が古典を利用したこととの間には、なお短絡を許さない検討の余地が残されていると思われる。われわれは、彼がどのように古典を利用し愛好したかという側面とともに、古

典とは彼にとって何であったのか、さらに何故古典を引用したのかという側面をも無視するわけにはいかない。

さてヨアンネスはあれだけ古典作家を引用しながら、しかし一方で現代人を引用することに誇りをもっていると明言し、古典でなければならぬという単純な発想はしていない。彼は『メタロギコン』序文に言う。

私は現代人の意見を引用することを少しも無価値だとして斥けるようなことはしなかった。その意見が多くくの点で古人のよりもすぐれていると確信しているからである。そして私は確かに、現代の人々の栄光を「われわれが古典に対してするように」後の時代の人々は称讃するだろうと思っている。(一)〔内は引用者〕

古典は「規範」として尊重しつつも、なお規範たりえたとし現代の著作も古典と同列に位置しうる。それはパノフスキの言う「現代と過ぎ去った古代との間に一定の距離を認め」るものではなくても、なお「規範」の意味を彼がどのように捉えていたかのひとつの例示とはなりえよう。この観点はさらに次のような表現を生む。

ばかでなければ誰が一体、それがただコリックスやブリッソンやメリッススによって言われたというだけで、その主張を真正のものと言うであろうか。それらは皆アリストテレスがその名前を例に挙げたという以外とるにたりない連中なのだ。また誰が……ジルベルトゥス、アベラルドゥスやわれわれのアダムによって言われたというだけで、その命題を排斥したりするだろうか。私は、自分自身の時代のよきものを侮蔑し、自分たちの時代のものを後世に伝えることを惜しむような連中に同意するわけにはいかない。<sup>⑬</sup>

後三名のうちジルベルトゥス (Gilbert de la Porrée)、アベラルドゥス (Abélard) とは言うまでもなく、当時宗教界におけるその権威絶大とされた聖ヘルナルドゥス (S. Bernard de Clairvaux) にそれぞれその教説を告発された人であり、またアダム (Adam du Petit-Pont) は一種の詭弁学派の祖とされ、当時の世評が芳しくなかったことは他の個所のヨアンネスの口調よりも察しられることである。このように、<sup>⑭</sup>ともども賞揚するにためらいのもたれていたその三名を敢えてこのように引合いに出した点に、ヨアンネスの古典を含めた他人の著作、学説を利用する際の姿勢が明確に現われている。

彼は古典に何を求め、そして何故古典を利用したのか、それは次の二点にまとめられる。

まず第一に、真なるものの追求を前面に押し出し、古典をその補助として利用したという点である。「規範」は著作家の側にあるのではなくその思想の側にある。それゆえ、規範として他人の所説、文章を引用しようとするとき、彼は古代、現代という表面的バロメータに関らず、また世評や政治的配慮等を度外視し、その意見が真か否かというものを唯一の基準とする純粋な姿勢を保とうとする。一見当然のことではあるがこの点は強調する必要がある。けだし「規範」の意味が、この点ばかりは不当にも何故か未だ払拭されずに残る十九世紀的中世観から脱して、現代的色彩をおびてくるからである。そして彼の古典利用もこの姿勢の枠内で考えなければならない。つまり彼にとって古典とは、すなわち規範たりうる古典とは真理に至るための知識の宝庫なのである。この観点でみれば古典の等閑視は無知に結びつく。無知はしたがってヨアンネスにとつては怠惰に他ならない。文法上の「破格」(Figura)のもつ意義、および「理性」(Ratio)の永遠性に関して彼の下すコメントの行間に、彼のこのような意識を垣間見ることが出来る。

ドナートゥス、セルヴィウス、プリスキアヌス、インドルス……その他多くの人々がすべてこれについて論じてきており、それゆえにこれに無知であることはただ怠慢であるばかりなのに。<sup>⑧</sup>

もし誰かこういうことはばかげたことだと言う者があれば、その人はアウグスティヌスの『自由意志論』を読むがよい。この書は十分に彼を納得させるであろう。<sup>⑨</sup>

古典とは長い時代における人間思考の集積である。過去の偉大な人々が真なるものを追求し後世に残し、しかも後代の多くの人々が検証し真として伝えてきたものが古典である。それゆえ古典には、古代のものという特性以上に真なるものという価値が付帯している。彼が古典に求めたものはこの真という価値なのであった。さてここから当然に帰結されるように、彼の古典利用の第二点は、古典を手段と捉えている点に求められる。彼は自己の、すなわち現在ある自己の知識の拡

大を、過去の人間思考の集積たる古典に求める。それは知識の拡大にとってきわめて効果的な手段である。それらを吸収することは、過去の偉大な人々が長年月をかけて得たものをすべて短時日のうちに体得することになる。このような姿勢は古来いくたびとなく引用されてきた有名な次の言葉に典型的に表出されている。

シャルトルのベルナルドゥスは、われわれをよく巨人の肩に乗っている小人になぞらえたものである。われわれはわれわれの先行者たちよりも確かに広く遠くまで見ることができ。しかしそれは、われわれ自身が彼らより鋭い視力や高い身長をもっているためではなく、われわれが巨人の体で高く持上げられているからである、と指摘していた。私も喜んでこのことに同意する。<sup>②</sup>

古典学習の彼岸に約束された凱歌を控目に、だが大いなる自負心を秘めて謳ったこの意気込みは、しかし当面の課題に則して言えば、古典は利用しつつも、彼にとっての主体があくまで自己自身の側にあつたことを示している。それが古典であるからではなく、真なるものを内含し、そしてそれゆえに自己に益するから利用したのである。そしてさらに付言するならば、古典の規範性をその古さにはなく真なる教説に求める第一の姿勢も、手段として古典の知識を利用する第二の姿勢も、何が真であり、何が自己の身長を高める手段となりうるかを決定するのはあくまで自己の判断力であり、その点で、自己の理性の鋭さが古典利用に前提されていることは忘れてはならない。理性を研澄するのは学芸でありとりわけ古典学習であるが、逆に古典を十分に利用するためには鋭敏な理性が要求されるのである。

確かに、サザンの言うように「古典の根源の精神に徹底的に無関心」ともいえるし、リーベシュツツの言う「古代思想の体系を掘起こす」ことはヨアンネスに望むべくもない。しかしヨアンネスにとって何が最も重要なこととされ、古典の愛好、利用の質が彼にとって何であつたかを考えてみるなら、サザンやリーベシュツツの着眼点そのものが的のはずれたものであつたと言わざるをえない。そしてまたこの点でルネサンス史家の観点は、連続史観に立とうと断絶史観に立とうと、「模倣する現代」より「模倣される過去」の方により大きく視座を据えたがゆえに、ルネサンスと中世の双方の質の



高みを公正に判断する視角を欠落してしまっていると思われるのである。勿論同様に、彼の古典利用、博引傍証という外形的側面のみで彼の人文主義を論じても、彼自身の本質に何ら迫るものでないことは言うまでもなからう。

先程私は自由七科という学芸区分の伝統に対して彼のみせた姿勢を検討してきた。そしてそれが徐々に崩壊していく中であって、ヨアンネスが新しい時代への対応をみせつつ、なおその伝統の継承を志向していることをみてきたはずである。そのことは彼が古典に対して示した姿勢と同じであることが確認できるであろう。七科の枠が連綿と受容され続けてきた伝統であったからではなく、そこに彼が有効なものを認めることができたから、その伝統の崩壊過程になお踏み止って継承しようとしたのであり、しかも伝統のもつ権威に限定されることなく、新しい潮流に対応しうる充実したものにしようとする柔軟性を示すことができたのである。

古典や伝統が表層的に有している権威も、所詮はそれと対峙する自己をまっぴらに価値をもつものである。それらは一方で規範として自己を鍛え、知識の拡大を促すが、何が真の規範として古典たりうるか伝統たりうるか、それはあくまでも自己の理性が決定することでなければならない。ヨアンネスが古典や伝統という「権威」に対して示した姿勢をこのように検討してみれば、一方で彼はそのような姿勢を堅持すべきことを読者に説きつつ、他方で、自己の判断で真正と決定した「典拠」を、それが学芸修得にとって重要であり有効であるがゆえに、『メタロギコン』での引用を通して、読者に提示していると考えることができらるだろう。彼がその膨大な知識量とすぐれた記憶力を駆使して、彼の文章に多くの引用をちりばめたことも、また彼の引用が古典の根源の精神に肉迫するものでないことも、ともにヨアンネスを理解する上で本質的なことではない。彼が古典、伝統という権威に対して、意識的、無意識的であるにかかわらず、あくまで自己自身の理性、判断力を根柢に据えたその姿勢にこそ、最も評価すべきものをみる必要があると思う。

① C.N.L. Brooke, Introduction to *The Letters of John of Salisbury*, p. xliii.

② 例えば索引の整備されたウェブ版『ポリクラティクス』の索引から数えれば、引用著作家総数二五一名、引用文献数五一八冊におよぶ

(新田聖書会等)。<sup>6</sup> なり参考のため五〇回以上引用された文献を列挙す。<sup>7</sup> *Satirae* (Iuvenalis); *Factorum et Dictorum memorabilium* .. (Valerius M.); *De Civitate Dei*; *Aeneid*s; *Pharsalia*.. (Lucanus); *Constitutum primi diei Saturnationum* (Macrobius); *Deorum*; *Digest*; *Epistulae* (Horatius); *Satirae* (—)。なほ『メトロキノン』<sup>8</sup> には新築トリケメトロンを加へてある。<sup>9</sup>

- ⑧ C. Schaarschmidt, *Joannes Saresburiensis*, Leipzig, 1832 (後註③ 三四二—二四)
- ⑨ A. Clerval, *op. cit.*, p. 230.
- ⑩ C. C. J. Webb, "John of Salisbury", *Proc. of Arist. Society*, p. 91 f.
- ⑪ M. Chibnall, Introduction to *The Historia Pontificatis*, 1956, p. xi.
- ⑫ 現一九六五年より公開された「十二世紀ルネサンス学会」でのメノンネズゴゴゴの代表講演は「L'Humanisme de Jean de Salisbury—Un Ciceronien au 12e siècle」(Briger-Munk-Olsen), *Entrée sur la Renaissance du 12e siècle*, M. de Gandillac, et E. Jeanneau, ed., Paris, 1968, 二四—二六。
- ⑬ 彼の直接をうけた古典の知識をその引用形態から探らうとしてこの野心的の著作がある。この種の研究の常としてあまり成功してはならない言ふかたが「何れも」である。A. C. Krey, "John of Salisbury's Knowledge of the Classics", *Transactions of the Wisconsin Academy of Science and Letters*, vol. XVI-2 (1910), pp. 945-987.
- ⑭ H. Liebeschütz, *Medieval Humanism in the Life and Writings of John of Salisbury*, London, 1950, p. 84.
- ⑮ R. W. Southern, *Medieval Humanism and Other Studies*, Oxford, 1970, p. 30 f. なほ彼は中世のロマーニキヤを「神の隠護」「神の

friendship」に求め、これこそ「中世ローマニズムのきわめて偉大な勝利」と規定する。その点で彼の言う中世のローマニストは聖アンセルムス、聖アルナルドゥスである。(pp. 33-37)

- ⑯ こゝでは一応次の諸著を掲定して置く。K. ブールダマン、『宗教改革・ルネサンス・人文主義』(坂口昂吉訳)、創文社、昭和四九年(原著一九二六年)
- E. ガレン、『イタリヤのローマニズム』(清水純一訳)、創文社、昭和三五年(一九五二年)
- 『ヨーロッパの教育』(近藤恒一訳)、サイマル出版会、昭和四九年(一九五七年)
- E. ノブスキー、『ルネサンスの春』(中森義宗、清水忠訳)、思索社、昭和四八年(一九六〇年)
- 『人文学の実践としての美術史』(柏木隆夫訳)、中央公論社『世界の名著』統一五巻、昭和四九年(一九七〇年)、四四—五七〇頁。
- ⑰ K. ブールダマン、前掲書八五頁。
- ⑱ E. ノブスキー、『人文学の実践としての美術史』四四九頁、註(1)。なお、同『ルネサンスの春』第二章参照。
- ⑲ *Met. Prolog*, p. 9.
- ⑳ E. ノブスキー、『人文学の実践としての美術史』四四九頁、註(1)。
- ㉑ *Met. III-prolog*, p. 114 sq.
- ㉒ ノブスキーは一九〇年サン(Seus)公会議の異端宣告「シムペレウスは一一四七年より、一四一八年ランス(Rheims)公会議で審問を受ける。なお次節参照。
- ㉓ 例へば Putabatur [Adam] enim invidia laborare. (II-10, p. 80);...cujus (Adam) vestigia sequuntur multi, sed pauci praepediente invidia proficiuntur. (III-3, p. 129) などノブスキーの著作にて

らうは Cf. L. Minio-Paluello, op. cit., pp. 141-146. ヨアンネスは  
彼が弁証法しか学ばなうことを批判しつゝその知性、学識は評価して  
いる。ヨアンネスがアダムに常につける形容語 *Anglus Peripateticus*  
は、アハラルドウスをさす *Peripateticus Patrinus* と同じ (彼  
が *Peripateticus* と呼んだこと) の両者 (さ)。

① *Met.* I-19, p. 50.

② *Met.* IV-15, p. 171.

③ 「われわれは偉大な著作家の言葉に尊敬を払わなければならない。

…それらは証明または反駁のとき用いるときわめて効果的であるので、  
それらを知らない人は他人におくれをとることもなるのである。」

(*Met.* III-4, p. 131)

④ *Met.* III-4, p. 131.

## 2

ヨアンネスはある論争の叙述や自己の判断の表明の際、控目で、当該の問題に深く没入することなく対象と距離を保つ  
姿勢をしばしばみせる。① この姿勢はある場合には懷疑的、相對主義的印象を読者に与え、また態度決定における明確さの  
欠如が、哲学史上二級の思想家としては評価されてこなかった一因ともなっていると思われる。しかしこの姿勢は彼の意  
識の産物であり、彼自身著作の端々に積極的にこのことの価値を賞揚する記述を残している。例えば『メタロギコン』序  
文で、著作する者 (*scriptores*) の戒めるべきこととして「真理に対する無知」の他に、「虚偽の恥知らずな断言」「真理  
の傲慢な表明」(*tumida professio veritatis*) をあげている。② 偽を真と錯覚して断定することほど著作者にとつて恥すべ  
きことはない。またそれゆえに、たとえ真と確信していても偽たりうる可能性は常に考慮すべきであり、さらに真理のも  
つ特性のゆえにも、真だからとて横柄に表明することはやはり慎まねばならぬ。彼はこの言葉の中に真なることの決定、  
表明にはあくまで慎重、謙虚であるべきだという自戒をこめたものと思われる。また次のようにも宣言する。

私はアカデミーの学徒であるから、賢者 (*sapiens*) にも疑わしいようなことで、自分の言ったことを、これこそ真だ  
などと誓いはしない。真であるにせよ偽であるにせよ、私はただ蓋然性だけで (*sola probabilitate*) 満足しているの  
ある。③

このことは、同一巻十章で彼の弁証法上の師の一人であるロベルトゥス（Robert de Melin）の教授法を回顧して、

彼は、提起されている問題に対し反対の立場を取出さずには、またその言葉の多義性を決定するにあたり解釈は一通りだけではないと教えずには、決してその問題に対する追求をやめなかった<sup>④</sup>。

という態度を評価していることにも通じるであろう。この一種の懷疑主義の中に、なお彼が積極的に、独断に陥るかも知れぬ断定を避け、あらゆる可能性に途を残すことこそ真の思索者にふさわしいと自負していることが読みとれる。またさらに同第四巻では、真理到達にとつての阻害要因を八項目列挙した中に「可能性を有する意見の混乱した争い」（*probabilium conflictus opinionum*）なる一項を加え、また、「中庸の心」（*sobria*）で学ぶ者は「自己の理解力を越える問題に無分別に突込んでいきはしない」と述べている。ここでいう「可能性を有する」とか「自己の理解力を越える」という表現は、先の「賢者にも疑しい」と同様逆説的に考えるべきであり、おそらくは先程述べたコルニフィキウス一派のごとき似而非弁証法家を直接に措定してのことであろうが、閉塞した空虚な議論への埋没は結局真の目的にとつて否定的価値しかもちえないことを言っていると思われる。

以上のような彼の態度を仮に「中庸」と名付けておくならば、この「中庸の精神」はヨアンネスを理解する上で重要な一面を構成していると思われる。ここでは彼の著した年代記『教皇史』中のランス公会議でのジルベルトゥス審問の叙述のあり方を検討しつつ、この「中庸の精神」の意味について考えてみたい。

一一四八年ランスにて開かれた公会議では、十二世紀の神学、哲学史上無視しえぬ重要な論争が行なわれている。すなわち、当時ポワチエ司教であったジルベルトゥス（Gilbert de la Porée）が、その教説に異端の疑いありとして彼の副司教に告訴され、当時の宗教界に絶大な影響力をもつといわれたクレルヴォー修道院修院長ベルナルドゥス（S. Bernard de Clairvaux）を中心にこの公会議でその教説が審問されたからである。この審問においてはジルベルトゥスの異端性は結局証明できぬまま落着をみたが、そこには多くの疑惑が残されることになった<sup>⑤</sup>。さてヨアンネスには無記名で著わされ

た『教皇史』(Historia Pontificalis)<sup>⑧</sup>という年代記があるが、この公会議に出席した彼はこの事件を『教皇史』八一十四章に詳述している。『教皇史』は彼がフランス亡命中一六四年ごろ脱稿したもので、作者自ら、ルカからエウセビオスやベーダ等々を経て連綿と継続された一連の教会年代記の延長線上にこの書を位置づけている。<sup>⑨</sup>直接には一一四八年から一一五三年まで、すなわち彼が教皇庁に何らかの形で関っていた時代の教皇庁に関する諸々の事件を対象とするが、全体の約三分の一はこの審問の叙述にあてられている。

さて彼はこの叙述において、論争の主役ジルベルトゥスとベルナルドゥスを徹底して対等に扱おうとしている。修飾語も同級(ほとんど最上級)をほぼ同じ長さで用い、叙述も一方に片寄せさせることはしない。<sup>⑩</sup>さらに、この事件は単に両者の神学論争にとどまらず、背後にベルナルドゥスの影響力増大をおそれ、それゆえにジルベルトゥスを支持する枢機卿グループと、ベルナルドゥスを支持するフランス聖職者とを配する、政治的色彩の濃好なものであったと近年の研究は指摘するが、ヨアンネスは、枢機卿の行為は、「神の栄光につつまれて行動においても説得力においても力強い」ベルナルドゥスに対する「嫉妬」<sup>⑪</sup>であり、一方フランス聖職者がジルベルトゥスを攻撃するのは、彼の「名声や徳性に対する嫉妬(競合心 emulatio)」か、「その権威が当時絶頂にあった修院長(ベルナルドゥス)への配慮」<sup>⑫</sup>だろうとして、背後勢力の動きを視角からはずし対立を両者のみに限定する。そしてその上で両者はそれぞれの立場で純粋だとするのである。

私にしてみれば、あれほどの聖性に充ちたあの人(神への愛に導かれていなかっただとも、あれほど荘厳で博学なあの司教が、たとえ他者の眼にどう映ろうとも、理性に合致しないようなことにも関っていたなどとは、信ずることができないことである。<sup>⑬</sup>)

こうして背後勢力の動きを斥け、しかも両者とも謬るはずはないとした彼は、論争対立の原因を両者の立場、専門領域の相違に求める。すなわち一方には世俗学芸における学識を評価し、他方には聖職者としての徳性や知性を評価する。

彼(ジルベルトゥス)はきわめて鋭い知性の持ち主で、膨大な読書を重ね、読書と熱心な研究にほとんど六十年余り

を費して、公正に判断して、自由学芸においては他者の追隨を許さないほど該博となった人である。<sup>⑮</sup>

「修院長はすぐれた説教者であって、私には聖グレゴリウス以来誰も彼に匹敵する者が無いと思えるほどである。彼は文体の典雅さですべての人々を凌駕し、聖書研究に造詣深く、いろいろな問題を予言者や使徒の言葉で十分に説明することができるところであった。」<sup>⑯</sup>

そして両者とも「聖書のすぐれた註解者」である点では共通としつつも、聖ベルナルドゥスを「聖務に堪能」だが「世俗学芸にはあまり通じていない」とし、一方ジルベルトゥスを、ベルナルドゥスがすぐれている「聖書の章句にはそれほど通じていない」が、教会博士たちの教説や世俗学芸に秀でているとしてその差異を明確にしつつ、論争はそのような領域を異にする両者の齟齬から生まれたと述べるのである。この完璧なまでの中立性はみごとなものである。個人的には、ヨアンネスはジルベルトゥスの神学上の直接の弟子であり、またベルナルドゥスとも親しいという錯綜した関係にあり、この公会議中には、両者の仲介者たりつつもなおベルナルドゥス側の一員として行動した形跡もみられるが、『教皇史』の叙述ではあくまでも両者をもとに評価した中立的立場に徹しているのである。この点はどのように解釈すべきだろうか。

ここでは、両者にもたれた非難、疑惑を紹介しつつ、彼がそれらについてどう答えているかをみてみたい。まずベルナルドゥスについては、一一四〇年サンの公会議で、アベラルドゥスに弁明の余地も与えぬまま異端宣告を下した思い出が強く人々の心に焼付いており、今回もその再現かと疑われたのは無理からぬことである。しかしヨアンネスはこのランスとサンの両事件の関連には強いて沈黙する。ただ一ヶ所、ある場面におけるベルナルドゥスのやり方にふれて「枢機卿たちは、彼がかってまぎに同じやり方でペトルス師（アベラルドゥス）を攻撃したと言いつつ」と記しているが、そのあとで、「枢機卿のある者たちは彼に嫉妬を燃やし、中傷をやめなかったのも事実である」と付記し、事実上それら枢機卿の言説を斥けてしまっているのである。さて、この事件についての史料としては同時代人の手になるものがあと二つ現存しているが、そのうちのひとつ、フライジングの司教オッター（Otto von Freising）の『フリードリッヒ皇帝伝』（Gesta

Frederici I Imperatoris) (以下『皇帝伝』と略す) 第一卷四八一六一章と比較してみよう。オットーはまずこの事件の導入だけ述べたのちすぐアベラルドゥスの場合を詳述し(四九一五一章)、「上述のペトルスと同様の手口でジルベルトゥス司教を有罪にしようと企てていた」と、両事件における聖ベルナルドゥスのやり方の類似性を強く指摘する。しかしオットーによれば、アベラルドゥスは高慢で自尊心強く、「自分の教師たちの言うことを聞くという、そんな身の処し方のできない人」だが、ジルベルトゥスは「自分自身の知性よりはむしろ教師たちの権威の重さにより多くの信頼をおく」タイプで、ベルナルドゥスの企図にもかかわらず「今度は同じ理由もよく似た材料もなかった」。このようなオットーの叙述は、ベルナルドゥスを「世俗の智慧に信をおいたり、あまりにも人間的議論に執着するようなマジステルたちには憎悪をもっていた」と表現して、その批判の対象の一般的共通性を強調することと相俟って、この事件の原因をベルナルドゥスの「策謀」に帰していることを窺わせる。また彼は、ジルベルトゥスが説教、講義でも異端的言説を弄したことを証言する者たちが、およそ学識ある人にふさわしからぬ方法だったことを「出席していた多くの人々は驚いた」と記して、暗にその証言を否定する。さらにベルナルドゥス陣営はジルベルトゥス神学を論駁するため、四ヶ条の『信仰命題』(capitula)を作製し彼に同意を迫るが、オットーは、このことは伝統的な枢機卿の権威を無視したとして枢機卿たちを激怒させ、彼らは教皇に然るべき対応を迫ったと記し、さらに、ベルナルドゥスはしかし言葉巧みに教皇に弁護してその行動を封じたと付言する。このようなオットーの叙述は明らかにベルナルドゥスに批判的に展開されていると言えよう。彼は死の床で、あまりにジルベルトゥスに好意的であるがゆえに歪めてしまった部分を訂正したいと語ったと伝えられる。しかし現実には彼はこのように記して発表したし、またこの観点は一面では当時ある一般性をおびていたとは言える。そしてこのようなオットーの叙述を一方においてみれば、ヨアンネスがこの事件とアベラルドゥスの場合との関連を強いて無視したことの意味はおのずから明らかになる。すなわち、噂されていたようにアベラルドゥスの時との関連を認めることは、方法の問題としてベルナルドゥスを一般化することになり、策謀という側面が強くなる。彼はこのことを避けようとしたのだと

考えられるのである。彼はあくまでベルナルドゥスの行動を純粋な宗教心の発露と捉えようとしている。それだからこそ彼の行動は「信仰に対する熱情と熱烈な神愛によって吹舞されていないとは信じがたい」と随所で強調するのである。

ではジルベルトゥスに関してはどうだろうか。これは、聖ベルナルドゥスの秘書で、公会議でも彼の手足となって行動した、のちの第四代クレルヴォー修院長オーゼルのガウフリドゥス (Geoffrey d'Anxerle) の著作と比較して考えてみたい。この書は筆者の立場からも予想されるごとく、きわめて論争的性格をおびたもので、ジルベルトゥスには教説から用語、態度に至るまで徹底的に批判的である。彼によればジルベルトゥスは次の三点で有罪とされる。(1)証拠に残らぬ説教、講義での異端的言説、(2)ボエティウス『三位一体論』への註釈にみられる明白な誤謬、(3)公会会にとって明白に真である『信仰命題』への不同意。そして彼はさらに、ジルベルトゥスは用語の難解さで人々を眩惑させ、巧妙に自己の教説を覆い隠していると非難し、彼の弁明は偽りのものと断言している。しかしこれらに対しヨアンネスは(2)について、問題の個所はジルベルトゥス自身の手になるものではなく、弟子が勝手に加筆修正したものと、とする彼自身の弁明を詳しく紹介して、司教（ジルベルトゥス）の弁明はこれで十分になされたと枢機卿たちが認めたこと、ベルナルドゥスの反論にもかかわらず教皇も認めそのように宣言したこと、という「事実」を叙述する。また(3)についても、自己の信仰や教説が「正しく理解されさえすれば」決して『信仰命題』と矛盾しないと司教自身が主張していると記し、さらにその補説として、司教にとって「異端の区別をすら満足にできないような無教養な者が、執拗にも彼に異端の汚名をきせようとしていること」は耐えがたいことであつたとコメントする。また『教皇史』から逸脱しつつも彼自身の立場で、ジルベルトゥスの教説と『信仰命題』を註解し、神学的にも弁護する。なお(1)については何も述べないが、この点に言及しないことと、多くの人々の審問に対してジルベルトゥスが「確固たる論証と典拠によって」返答したと記すことに、彼の判断は窺えよう。そして最後に用語に関して、難解であることは一応認めつつも「しかし初学者には難解に思えたが、より研究の進んだ者には簡潔で深遠」と評価し、その非難に反駁している。以上のように、彼はジルベルトゥスにもたれた疑惑を次々に晴



らし、彼の側に非難の余地は全くないことを証明した。<sup>88</sup>しかしまた一方で、それゆえに残された事件の原因の唯一の可能性たる聖ベルナルドゥスの策謀という面も、彼にとっては認めがたいものであった。こうして彼は両者とも「白」と決定し、その原因を両者の専門領域の相違から来る齟齬に求めたと考えることができる。

さて以上みてきたように、この事件についての彼の叙述はあくまで客観的である。また彼は『教皇史』の史料を直接見聞に基づくものか、然るべき権威によって保証されているものに限定したと序文で述べているが、この事件を述べるに際して再び「私は自分の見たことを話す」と注記して叙述の客観性を強調している。叙述があるいは独断にあるいは誤謬に陥るかもしれない危険性を考慮し、客観性の中に「事実」の確かさを信じ、そのみに関わろうとする姿勢は、初めに述べた偽を真と誤って表白することを避けようとする意識、あるいは真なることに對する謙虚さを保とうとした意識の現われである。またこの叙述はあまりに中立的である。ここにも、さまざまな臆測や疑惑に包まれた両者に対し、自己の判断を表面に出さずに、ある意味ではすりかえとも言える形でなされた対等の叙述が、断定を避け、両者のもつ正しさの可能性とともに保持しようとした意識の現われであることを認めることができる。それゆえその客観性中立性は、年代記作者としての制約や、ベルナルドゥス、ジルベルトゥスというその影響力大なる両者への政治的配慮等を越えて、何よりもヨアンネスのもつ「中庸の精神」の所産であると考えられるのである。

しかし一方彼の客観的、中立的な叙述の背後に、この事件に對する彼自身の強い確信が窺われることは否定できない。この事件の記述中彼が評価しているのはこの両者だけであり、当然にこの審問に関係したフランス聖職者や枢機卿グループは、その行動の原理が嫉妬、追従であるとして、視角より除外されてしまっている。しかもそうしておいて彼がベルナルドゥス、ジルベルトゥスに求めた行動原理は、それぞれ「信仰に對する熱情」と世俗学芸を通した「真理への愛」であった。この視点の対照は次の二様の意味で鮮やかである。第一に、少くとも彼の意識においては、両者の行動原理と、嫉妬、追従による行動原理との対照がここに投影されていることが窺える。すなわち背後勢力を控目だが手放しい言葉でも

って視点からはずすことと、対立を両者に限定して叙述することによって、この対立に示された、さらに言えば、結局はこういう対立を生み出さざるをえないまでに真摯な、両者の探究の誠実さ、純粹さを謳っているとは解釈できるのである。このように真摯さをこそ評価する価値観は、『教皇史』の他の叙述にもみられる。例えば市民を扇動し教会と対立させ、「シスマの張本人」(auctor scismatis)として結局は焚刑に処せられたアーノルド・ダ・ブレッシア(Arnold da Brescia)に比較的好意的な叙述をみせるのはその好例であろう。結果的には公教会に敵対し、異端の烙印をおされたにもかかわらず、彼はアーノルドのもつ「この世の虚栄の攻撃者」としての熱烈な信仰心を、ふと公教会の年代記作者たる制約を逸脱して評価していると思われるのである。第二に、ベルナルドゥス、シルベルトゥス両者の探究方向の対照が示される。一方は神祕主義的思想家であり修道者であり、他方はアベラルドゥス同様世俗学芸を用いて聖書解釈を試みようとした知識人である。このように聖書の真理に対するにある意味では正反対とも言える方向を示し、決して和解しようとはしなかった両者を、しかし彼は甲乙をつけずに徹底して対等に叙述している。このことはどのように解釈すべきだろうか。この点については次の言葉は示唆的である。

そして私の考えるに、彼(シルベルトゥス)は今(一一六四年)両者とも既に故人)もはや、修院長やその他の聖人たちが意見を異にすることはないのであろう。何故なら両者とも、その生涯をその探究にかけてきた真理と、今直接に出会っているのであるから。(括弧内、傍点は引用者)

ここでいう真理とは神の真理であろうが、彼は、異なった探究方向を示したにもかかわらず、両者は真理に到達している(はず)だと言っているのである。ここでその方向性の差異は問題となっていない。すなわち彼が両者を対等に叙述したことは、また、その方向性に甲乙をつけることなく、真理に至る途の多様性を認めていることを示していると考えられるのである。ただし当然に両者が異なった途をたどりつつも、しかしともにその探究においては誠実で純粹であることが前提となっていることは言うまでもない。そしてこの点にこそ彼の「中庸の精神」の最も端的な発現を認めること

ができる。

ヨアンネスにとって「中庸」とは、判断停止でもなければ好便な相対主義でもない。それは一次的なことと副次的なこと、本質的なことと非本質的なことを区別して、一次的なことに十全に関わるために、二次的な係争を遠ざけてそれに拘泥することを避けようとした慎重な姿勢である。あるいは、本質的なことから視点をそらさなければ、むしろ積極的に、非本質的次元での混乱に介入すべきではないとした姿勢である。またこの「中庸の精神」は真摯な研究と対立するものではない。当然そこには、副次的非本質的な係争に対する「中庸」の対偶として、一次的本質的な問題に対する真摯で妥協を許さぬ態度が前提されている。彼が時代の問題に積極的に没入していかないのも、「可能性を有する意見の混乱した争い」を真理到達の阻害要因としたのも、あるいは似而非弁証法家の煩瑣な議論を侮蔑し、アダム・ドウ・プティボンの言葉だからと軽視すべきでない抗弁したのも、いずれもそれが非本質的次元でのことに関わっているからである。逆に、例えば自己の判断ではなく他者への嫉妬あるいは追従で行動する（と彼には思えた）者たちには、サン・ドニ修道院院長シュージュルや自己の師たちまでも含めて手厳しく論評を加えているのである。ヨアンネスのこの「中庸の精神」は十二世紀の他の思想家たちにはあまり類例をみない彼の特性のひとつである。おそらくそれは彼が職業教師でなかったことと無関係ではあるまいが、ともかくここにヨアンネスの思想を根柢で規定している重要な核がみられると言えるだろう。

① ホイシエンガはこの点について「Forse とうい言葉が彼の作品としてはしばしば用いられるように思ふ」と記している。(前掲論文「二四三頁註」)

37

- ② *Met. Prol.*, p. 10.
- ③ *Met. Prol.*, p. 9 sq.
- ④ *Met. II-10*, p. 79.
- ⑤ *Met. IV-40*, p. 201.
- ⑥ *Met. IV-40*, p. 201.

⑦ この事件を主に哲学的、神学的に扱った論考は多い。特に次の諸論を参照された。A. Hayen, "Le Concile de Rheims et l'erreur théologique de Gilbert de la Porrée", *Archives d'histoire doctr. et lit. du moyen âge*, tome X (1935/36), pp. 29-102; N. M. Haring, "The Case of Gilbert de la Porrée (1142-1154)", *Medieval Studies*, vol. XIII (1951), pp. 1-40; M. L. Colker, "The Trial of Gilbert of Poitiers, 1148", *Medieval Studies*, vol. XXVII (1965), pp. 152-183.

⑧ R. L. Poole, ed., *Iannis Saresburiensis Historia Pontificalis quae supersumit*, Oxford, 1927. なお英語の対訳は次のテキストから出た。  
 ⑨ M. Chibnall, ed., *The Historia Pontificalis of John of Salisbury*, London, 1956.

⑩ 『教皇史』は「ヨアンネスが英王ヘンリー二世と対立したカンタベリー大司教トマス・ベクタートの秘書官時代」その対立に起因してフランスに亡命中の一六四年に執筆されたこととされている。一応友人であり、亡命中の保護者としてのベトリス (Pierre de Celle) の依頼に応えて書かれた。ベトリスを tuus 呼称形式で記されていることはその序文の記述には明らかに普通の年代記たることと意図をなしている。すなわち彼は序文において「公教会の栄光の歴史における年代記は必要であることと述べて、続いて「カ・エウセリオス」・「ヒエロニムス」に始まり、「ベトリスを経て聖ヴァクトル教会参事会員フローに至る一連の年代記を列举し、それを引継いだジャンローの修道士シモン・ベトリス (Sigbert de Gembloux) の年代記が一四八年をもって終わっており、」それ以来教会文書の中には将来の著述者の助けとなる多くの記憶すべき事件をみつけながら年代記は一つも知らざり」のついでを記すこと述べる。明らかに伝統的年代記の系列の一として、読まれるべき意識した著作として書かれたと思われる所似である。

⑪ 一例として冒頭の文をあげよう。 «Elocutus apparbat in curia nra ecclae nostra litteratissimus, magister Gislebertus episcopus Pictanorum, responsus clarissime opinionis et eloquentissimo viro abbati Clarenallensi, super : (*Historia Pontificalis* [「*ヒストリア・ポンティファリス*」] cap. VII, ed. Poole, p. 16)

⑫ H. C. van Elswijk, O. P., *Gilbert Porreta : sa vie, ses oeuvres, sa morale*, Leuven, 1966, pp. 95-97.

⑬ erat... certum quod ei (i. e. Bernardo) quidam cardinalium plu-

rimum inuidebant, nec a detractone poterant continere. (*Hist. Pont.* IX, p. 22.)

⑭ Incertum habeo an zelo fidei an emulatione nominis clarioris erat anchoritas... (*Hist. Pont.* VIII, p. 17).

⑮ *Hist. Pont.* VIII, p. 17.

⑯ *Hist. Pont.* VIII, p. 17.

⑰ *Hist. Pont.* XII, p. 27.

⑱ *Hist. Pont.* XII, p. 27.

⑲ シルヴェスターは一四二三年カトリック教に叙品されるまでの約一年間神学を学んでいる。(Met. II-10; R. L. Poole, "Masters...", pp. 325-333.) 期間そのものは短いが、しかし『メタロギオン』に見えるシルヴェスターの描写には深い尊敬の念が読みとれる(特に第一卷五章)。

「シルヴェスターとは史料的には紹介一本が接点でしかないが、後述(註⑯)の關係からある程度の接触は予想される。通説に従えば、この公会議で、彼は彼の神学および教会法上の師であり、また彼が教皇庁にあった時代枢機卿として彼の政治思想に多大の影響を及ぼした(H. Liebeschütz, *op. cit.*, p. 23 f.) シスター派会士ロベルト・プレンク (Robert de Pullen) を通じて聖シルヴェスターと組織づけられたヨアンネスの紹介 (Bernardi *Ep.* 361; P. L. CXXXIII, 562) 彼のヨアンネスはカンタベリー大司教の秘書官となったとされている。しかしこの紹介状および秘書就任の年代決定には諸説入り乱れている。なお、本稿「はじめに」註①参照。 Cf., R. L. Poole, "John of Salisbury at Papal Court", p. 321 ff.; H. Liebeschütz, *op. cit.*, p. 91; C. N. L. Brooke, *op. cit.*, pp. xiv-xix, & pp. 253-6. 但し私の立場として、この紹介状をヨアンネスが利用したとして論

考することからはなれて、利用していなご可能性から検討する視点が必要ではなかつかと思つてゐる。

- ① 「私は私自身が修院長の側に立つて、(ex parte abbatis) 司教と会見し、ホワチニでもフランシスでもブルグンディでもどこでもどこか彼(司教)の好む修道院で修院長と会つて、聖ヒヨリウスの著作を親しく、根柢なく議論してはしつて言つたのを感じてつてゐる」(*Hist. Pont.* XII, p. 27) (宛宛付註用紙)
- ② *Hist. Pont.* IX, p. 20 f.
- ③ *MGH. SS.* XX, pp. 376-85.; R. Emery, tr., *The Deeds of Frederick Barbarossa by Otto of Freising...* New York, pp. 82-101. (以後の頁数をこの英訳の頁をよむべし)
- ④ *Gesta Frederici...* (以上 *GF. J. 卷四*)、1-52, p. 82.
- ⑤ *GF. I-49*, p. 83.
- ⑥ *GF. I-52*, p. 88.
- ⑦ *GF. I-52*, p. 88.
- ⑧ *GF. I-49*, p. 82.
- ⑨ 「彼らもまたかまも替りなててゐるかのごとく、それらの教説のいへんかを彼自身の口から聞いたこと宣言した。出席してゐた多くの人々は、論争の術にまけたこのやうな偉大な者たちが、論証の代りに誓ひをするとはどうして驚いた」(*GF. I-53*, p. 89)
- ⑩ なお前章との関係で附言するなら、この証言者の一人がアダム・ド・ヴァ・ノチャホンで、オッチャーは「油断のならぬ男」と表現してゐる。
- ⑪ *P. L. CLXXXV*, 597 C sq.; *GF. I-59*; *Hist. Pont.* XI, 49 Cf., R. L. Poole, Preface to the *Hist. Pont.*, xliii f.
- ⑫ *GF. I-60*, pp. 99 f.
- ⑬ これはサマナーの死後『皇帝伝』執筆を止むき離れたラドウィーンの証言である。Cf., *GF. IV-14*, p. 248.

⑭ *Gaufridi Libellus contra capitula Gilberti Piacaviensis Episcopi.* (*P. L. CLXXXV*, 596-618); *Epistula.* (*P. L. CLXXXV*, 587-595) 前者はシルヴェルトウスの教説駁論。シルヴェルトウスの死後執筆された。また『教皇史』に言及されてゐるから、一一五四—六三年の間のもの。後者は一一九〇年頃、巷に流布されたシルヴェルトウス無罪論への反論。この書の執筆経緯については Cf., H. C. van Elswijk, *op. cit.*, pp. 78-82.

- ⑮ *Libellus contra capitula Gilberti...* *P. L. CLXXXV*, 597 B.
- ⑯ *Hist. Pont.* X, pp. 22-24.
- ⑰ *Hist. Pont.* XIII, p. 29.
- ⑱ *Hist. Pont.* XIII sq., pp. 29-41.
- ⑲ *Hist. Pont.* X, p. 22.
- ⑳ *Hist. Pont.* XII, p. 28.
- ㉑ 『教皇史』の *Libellus* への反論を表面に出してはしなうが、*Libellus* をよめたとすべの叙述であることは推定してよしかえなからう。なほ一個所、*≡* *フンネス* *≡* *Libellus* *≡* されて次のやうに言へ。「この書は文体も優雅で訴える力ももつが、ただ論争的性格をおび、ある種の遺恨より発してゐると思われぬ」(*Hist. Pont.* XI, p. 26)
- ㉒ 「今から書ごうとしてゐるものの中へ、私は、神の權威の名ごかけ、私自身が實際見たり聞いたたりしたことによって、真実であること私の認めてゐるもの、または確実な人物の記述によって權威のおかれてゐるもの以外は書かなうとせりである」(*Hist. Pont. Prol.*, p. 4)
- ㉓ *Quod uidi loquor et scribo.* (*Hist. Pont.* VIII, p. 18)
- ㉔ *Hist. Pont.* XXXI, pp. 63-66.
- ㉕ 前出註②に掲げた *カウヅ* *≡* *フンネス* は両者の間に一応の妥協が成立した後、両者を親しく会見させようとして行動する。しかしこれに對しシルヴェルトウスは、自分は十分語つてきたし執筆して示してきたこ

れで分らないのは聖ペルナルドウスが無教養だからで、自分と会う前に自由学芸を学び直して来い」と返答し、*「みづから拒絶をわけてゐる。」* (Hist. Poul. XII, p. 27.)

#### 四 おわりに

② Et ut arbitror nunc ab abbatis et aliorum sanctorum sententia non discordat, quia simul semper optatam inspiciunt veritatem. (Hist. Poul. VIII, p. 18.)

以上ヨアンネスの学芸観を学芸修得にみせた姿勢を含めて検討してきた。そこには次の三つの精神が基底部で彼の観点を支えているように思われる。まず人間理性に対する強い信頼感である。すなわち人間理性の射程内にあることはすべて知識として獲得すべきであるし、また人間の能力は十分にそれを可能にするという、オブティミスティックなまでの確信である。彼の学芸観のひとつの特徴は、基礎課程を長い時間をかけて修めることを説く点に認められるが、そのことは、そうしさえすれば「解決可能な問題の糸口をときほぐす」ことが可能になるという強い確信を背景にしているのである。無知を怠慢とすることも同様の意識の所産であろう。またこのことは「巨人の肩に乗った小人」の譬に如実に示されるように、過去を吸収しつつ人間の知識は常に拡大進歩すると楽天的に信じえた意識とも共通しよう。第二に、学芸は現実社会での効用、厳密には倫理規範としての効用をもつべきだとする価値観である。知識はそれ自体として目的ではなく、また哲学は単なる机上の思弁に限定されるものではない。多少修辭的なにおいがしなくてもないが、「家政にも軍隊にも商売にも宗教にも、政治にも教会にも全く有効でないようなことに自己を限定し、学校だけで評価されているようなら、弁証法は無意味である」という表現は十二世紀に類例をみないものがある。そして第三には、既に検討してきた「中庸の精神」である。

彼の「中庸の精神」や、限定的にみた理性への信頼あるいは人間本性の尊嚴の評価は、確かにルネサンス期の人文主義者たちとの共通性を印象づけられる。例えばロレンツォ・ヴァッラやあるいはエラスムスに接して感じる、彼らの精神の中庸さ、理性に対する確信、等々は、若干の留保をばどこせば大筋においてヨアンネスの中に既に跡付けうるものである

と言える。そしてもし彼が人文主義者と呼ばれるならば、古典の引用や文体を問題にするよりも、むしろこの精神の面からアプローチされて然るべきであろう。しかしだからといって私は彼を人文主義者とかその先駆者であるなどと新たに提唱しようとは思わない。何故なら第一には、彼はまた十五、六世紀の人文主義者たちと鋭く対立する面も多くもっているからである。例えば人文主義者たちは、仮に学芸を現実社会での効用において捉えようとする点で彼に同意したとしても、決してそれを倫理規範の意味で考えはしないだろうし、また「巨人の肩に乗った小人」の譬とも無縁である。この点においては価値観を含めずに、ヨアンネスは古代を断絶したものとは捉えず、「知識の宝庫」としてあくまで連続的に捉えていると言えるだろう。第二に、そしてこのことがより本質的であると思えるのだが、十五、六世紀にあらわれた文化運動あるいはその潮流を規定する過程でうまれた「人文主義者」なる概念を、ヨアンネスに適用することがそれほど生産的であるとは思えないからである。このことは方法としての比較論を問題としているのではない。たとえその主張や意識あるいは姿勢に共通点が見られようと、人文主義者たちは十五、六世紀の現実の中でそれらを形成していったのだし、ヨアンネスは何よりも十二世紀中葉の現実とその基盤をおいていたのである。すなわち、ホイジンガも既に言っているように、「ある人に先駆者のレッテルをはると、その人は、本来そこで理解されるべき彼の時代から引きはなされてしまう<sup>①</sup>」からである。このことは慎重に考慮すべきであろう。

通常十二世紀はまとまった一時代として考察されてきた。それは「十二世紀ルネサンス」論にも関係し、十二世紀の「ルネサンス」としての特性あるいは十二世紀の果した文化的業績を一層強調するためにも、ハスキンス自らが行なったように、<sup>②</sup>「十二世紀」をそれ以前と以後に拡大して考えることはあっても、その中で常に十二世紀に不可分割な結合が与えられてきたことは事実である。しかし思想的には、十二世紀は明確にその中葉期を転期に二分されうることは軽視するわけにはいかない。われわれが十二世紀を彼らで語る哲学者たち——例えばアベラルドゥスやシャルトルのベルナルドゥス、ジルベルトゥス、ティエリー、ベルナルドゥス・シルベルトリス、さらにクレルヴォーの聖ベルナルドゥスやサ

ン・ヴィクトルのフゴー等——がすべて一一五〇年代末までに世を去っていることは、余りにも典型的なその象徴である。③  
 「十二世紀」精神の特徴ともされた古典主義が、世紀後半には衰退していくこともしばしば説かれることである。「ルネサンス」の名に値する「十二世紀」の思想運動は厳密には世紀前半に限定されて然るべきであろう。世紀後半にはそれに代って徐々にではあるが、法学研究や、翻訳活動に起因する一層シエマーティックな論理学研究が活発となり大学の形成を促していく一方、学的成熟特に弁証法の隆盛の必然的副産物として、「三学」の均衡が崩れ基礎教程が軽視されていくことや、煩瑣な議論の横行、学生の質の低下といった傾向が著しくなっていくだろう。その意味で、樺山紘一氏がハスキンスのあげた十二世紀ルネサンスの諸要素のうち、「大学の成立」「翻訳活動」「法学の復活」はむしろ除くべきだとし、それらは「いずれも、十二世紀に起源しながら、十二世紀精神を積極的に否定し、解体する方向をむいてさえている。④  
 それは、十二世紀精神の構成者ではなく、むしろ破壊者として十三世紀に奉仕することになろう」と指摘されるのは卓論である。ただもっとラディカルに、「十二世紀精神」を（氏のような形で規定できるとしての話だが）世紀前半に限定してしまうべきであつたらう。ともかくもいわゆる「スコラ学の時代」、樺山氏の用語を拝借すれば、「ゴシック世界」は十二世紀後半に始まっていた、あるいはその予兆を呈していたとは言えることである。そしてヨアンネスはまさにこの十二世紀中葉の過渡期に位置づけられなければならない。

十五、六世紀の人文主義者たちは、十三世紀という哲学史上偉大な世紀の形骸化した後裔たちに対し、基本的には過去を否定する形で彼らの観念を形成した。しかしヨアンネスは逆に十三世紀哲学に整合されていく前の混乱した状況に対し、むしろ十二世紀前半期の成果に基盤をおいて抵抗しようとして、自己の観念を形成したのである。それゆえ彼にとっては過去は否定するものではなく継承すべきものと映る。人間理性の確実な進歩を確信しえた所以である。また彼は本質的に保守的である。何故なら彼の眼前に展開されていく状況は、たとえ後になって実り豊かな成果を招来するとはしても、彼の時代には少くとも彼の意識における古きよき伝統の破壊であつたし、また弁証法の過度の重視が文法学や雄弁術の軽視



を十三世紀にはより鮮明に結果することへの予兆を、既に感じる事ができたからである。過去の伝統の継承の中にこそ発展があると信ずる所以である。人文主義者たちが古代を自己の世代との断絶として捉え、それゆえ古典を完結的に把握したのに対し、ヨアンネスにはその断絶感が意識されず、古典の十分な摂取の上に彼ら以上の成果を創造しうると信じたのも、時代状況の所産であり、比較以上の評価にはやはり慎重さが要求されるであろう。そしてその点でホイジンガが、ヨアンネスを慎重に「前ゴシック精神の人」と規定した慧眼には、今更ながら感服せざるをえない。<sup>⑥</sup>

① ホイジンガ、「ルネサンスの問題」里見元一郎訳『ホイジンガ選集

4』河出書房新社、昭和四六年、六八頁。

② Ch. H. Haskins, *The Renaissance of the Twelfth Century*, Harvard, 1927, p. 5.

③ Abélard (1142), Bernard de Chartres (1120 s.), Gilbert de la Porée (ca. 1154), Thierry (ca. 1150), Bernard Silvestre (1153), S. Bernard (1153), Hughes de S. Victor (1141), Guillaume de Conches (ca. 1154), Otto von Freising (1157), etc.

④ 樺山紘一、「ゴシック世界の思想像」『思想』一九七四年十月号、一〇二頁。

⑤ 例えは彼は時代の混乱を次のように記している。

「一体何がいわゆる粗野なままに残っているか。一体何が彼らに言わせれば洗練されずに残っているか。……みよ、あらゆるものが新しくなってしまった。文法は刷新され、弁証法はやき直され、修辭学などは唾棄されてしまった。そして彼らは先人たちのたてた諸規則を無視し、四科 (quadrivium) としての新しい方途 (viam) を「哲学」という名のやみ生み出してしまったのだ。」(Met. I-13, p. 17)

⑥ ホイジンガ、「前ゴシック精神の人——ノールズヘリーのジョン」『選集 4』

(京都大学大学院生)

# The Establishment of the Clan Community and the Centralized Local Administration of *Ri* 李 Dynasty

by

Hong-sik Kim

The reorganization of the local administration was a basis of the despotic monarchy of the early *Ri* dynasty. On the other hand it was a reflection of the rural community controlled by *doseishizoku* 土姓士族, native aristocracy. I think it is worthy of notice that the centralized local administration depended upon such a rural community. In this article, therefore, I would like to investigate into the relation between the centralized local administration and the rural community. Investigating into the relation I will pay attention to these points; the forming process of *doseishizoku* and its character; the development of the autonomy of *doseishizoku* from *ryūkyōsho* 留郷所 establishing movement to the establishment of *kyōyaku* 郷約 and *shoin* 書院; dominion of *doseishizoku* over the other members of the rural community; finally the continuous intention of *doseishizoku* to hold a central government post.

## John of Salisbury's View of Learning

by

Mineo Tanaka

John of Salisbury marks a distinguished figure in the intellectual activities of the twelfth century. His attitude to the so-called Becket-conflict, his political theory, his varied career as well as his vast descriptions of the various problems of his time, those are all interesting and have well called our attention. But we must not underestimate him as a philosopher or an educational theorist, and in that aspect, I think, his most interesting figure is laid out.

In this treatise, first, I analyze his view of learning. The main theme of his *Metalogicon* is *logica*, which is a valuable asset in all fields of philosophy, but which, if isolated, is nothing but useless and sterile.

Seeing his assertion that *artes* aim at *sapientia*, the fruits of which are *amor boni* and *virtutum cultus*, and that the potentialities of one's natural talent are realized by pursuing *artes*, we can consider his view of learning essentially practical rather than specially philosophical or theological. Secondly, I examine his attitude to the *auctoritas* and his distinguished character of "moderation". The most important thing for him is to search the truth. Therefore, he attached great value to the classical authors (*auctoritas*) not because they were ancients but because they told the truth: and if only the truth was pursued, he did not adhere to the complicated varieties of the ways to it.

Some Reflections on the Agricultural  
Policy of the SRs in 1917

by

Yoshikazu Isshiki

The Socialist Revolutionaries, the successors to the Russian Populists of the nineteenth century, had the settlement of the land problem in Russia as their main political object. The Revolution of 1917, though it was brought about by the spontaneous action of the people, was the first occasion when the SRs had every chance to put their land program, 'socialization of land' into practice.

This article is aimed firstly to clarify their policy on this problem at the time when the Provisional Government was formed and they got the support of the working masses, secondly to follow the measures they took to meet the unstable political and social situation during the fateful eight months and lastly to trace from these analyses one of the origins of their political decline and fall in the second half of this year.